

異国の戦争

小牧近江

異国の戦争

小牧近江



著者：小牧近江(本名：近江谷小牧)

1894年秋田市士崎港に生れる。／1910年渡仏
1918年パリ大学法科卒業／外務省嘱託，トル
コ大使館勤務／ハノイ印度支那産業，日本文
化会館勤務／戦後，法政大学教授，中央労働
学院長／「種蒔く人」「文芸戦線」同人，日本
ペンクラブ会員／1978年鎌倉にて死去／著書
「ふらんす大革命」「ロベスピエール」「ふらん
す革命夜話」「ある現代史」「イソップ 三代目」
「種蒔くひとびと」訳著「クラルテ」「地獄」「フ
イリップの小さな町」など。

住所：鎌倉市稲村ヶ崎 3-3-18

異国の戦争 定価一、八〇〇円 ◎昭和五十五年十月二十九日発行	著者 小牧近江	発行者 伊藤玄三郎	発行所 (株)かまくら春秋社 鎌倉市小町二一七・二一九 電話〇四六七・五二八六四 振替横浜 四一〇	印刷所 (株)東京印書館 写植 (株)工場のあ
---	----------------	------------------	--	------------------------------------

異 国 の 戦 争

小牧近江

装幀 岡本半三

小牧近江の唯一の小説

「異国の戦争」 礼讃

金子 洋文

はじめに、小牧のお父さん、近江谷井堂を語るのは、雑誌「種蒔く人」発刊と、運命的なつながりがあると思うからだ。

お父さんは詩人的性情で、明治の傑物的人物。郷土へ光りを与えるために発電所を作ったが、石炭購入の資金がつかず、しまいに薪を焚いたというから、面白い。

私が土崎小学校を卒業すると、翌日上京して、芝区愛宕町の電営舎の小僧になったのは、井堂お父さんの推挙によるもの。主人の山本さんは、発電所の技師長をやった人だ。

小牧も上京して暁星中学へ通っていたので、日曜毎に富士見町の近江谷家に通って、野球をやったり「おももの」(故郷土崎の河の名)という回覧雑誌を出したり、在京中約二年変わりなくつづいた。

電営舎は東電の下請工事をやっていたので、間もなく私も、東京の天井裏を伺いまわる

仕事を習得したが、一年半経た頃、樺太の長兄から、蟹で儲けた、蔵前の工業へ行ったらどうだ、と言ってきた。蔵前には、二、三の人も行っているのです、まず、秋田工業へ入学しようと思って郷里へ帰ったが、小牧が上野駅へ送ってくれた。約二年のこういう交りがなかったら、十年を経て、巴里遊学から帰朝した小牧とめぐり合つて「種蒔く人」を創刊したかわからない。

雑誌「唯物史観」の座談会で小牧が言っている。おやじは日露戦争当時、国民主義的グループの代議士、河野広中、尾崎行雄もはいていたと思うが、戦争を早くやめて平和にすべきだ、長びくと危い……というのが持論だった……”

そして一九一〇年、ベルギーで開かれた万国議員会議に出席のとき、息子を外交官にするつもりで伴だったが、小牧の本心は、早く暁星中学をやめたい一心からだった。暁星には親類の子弟たちが十一名も通学していて、月謝滞納がつづくので、授業中も、フランス語の教師が、意地悪く催そくする。それがたまらないので授業をサボることもしばしばだった。そういうことがあるので、お父さんと一緒に行くかな”ともらしたのをきいたお母さんが、お前、それほんとうか”ほんとうだ”と言ってしまった。私の一生はこれできま

った！”

このときの彼の遊学を、評論家の分銅惇作がこう言っている。『鷗外がドイツへ遊学して近代文学を日本へ持ってきたが、十六才の小牧近江が巴里へ遊学して、プロレタリア文学を日本でまきおこした。その評価は将来一そう大きく翹たかどうか。』

巴里十年の遊学は、生やさしいものでなかった。一年半後、学資がとだえて、着のみ着のまま、名門アンリ四世校を追われ、公園のベンチで寝たり、皿洗いをしたり、結局おやじと知合の石井大使にひろわれて大使館のボーイとなっている。

秋田へ帰った私の方はどうかというところ——蟹は沖に逃げてしまつて学資は送れないと、長兄から手紙がくる。やむなく、また新聞配達をやって入学資金を稼いで試験にパスしたが、芝の露月町の古着屋で買つてもらつたラシャ服を持ちながら、その年から改正された、知事へおべっかの勤儉力行の規約が禍いして、その洋服は着用できず、東京の天井裏を匂いまわった裏ナシの小倉服を着用して厳寒を三年もふるえながらすごさねばならなかった。そのうらみであつたらう、卒業間ぎわ、ストライキめいたことをやり、漸くラシャ服をかちとっている。

卒業後、土崎小学校で三年間代用教員勤務。「白樺」を愛読し、反戦ドラマ「ある青年の夢」を読んで武者小路實篤一辺倒となり、大正六年正月から、我孫子手賀沼のほとりに新

築した武者家に寄寓することになった。

手賀沼のほとりに、志賀直哉、柳宗悦あり、ときたま「白樺」の編集のあつまりがあるので、大学の学業よりもはるかに学ぶことが多かったが、一度我孫子を去ったそのちは二流、三流の雑誌、新聞記者をしているうちに、当時の革新の土壌であったアナキズムに感染し、イギリス田園詩人のカーペンターやクロボトキンの思想に傾斜しつつあったとき、小牧近江が巴里遊学十年、国立パリ大学を卒業して、日本へ帰京し、外務省につとめているときいたが、役人に会いたいと思わなかった。たまたま、秋田へ帰ったとき、公会堂で井堂お父さんにばったり会った。小牧君が帰ったそうですね。とたずねると、うむ：赤くなってきたのでよわっている。そりゃ、面白い。帰京したらすぐ会いに行きます。外務省に電話をすると、小牧の声音は、まるで詩のようだった、としば／＼私は書いているが、五十年六月「第三文明」という雑誌に、小牧が次のように書いているのを見ておどろいた。

（十年ぶりでハリからかえてきたわたくしは、外務省の情報部につとめていた。ある日の午後のこと、だしぬけに金子洋文から電話がかかった。長い間文通のなかった竹馬の友の「生の声」をきくことは嬉しかったが空恐しかった。なにかしら靈感のこもったものがあ

った）云々。

そのときの小牧の電話の声はたしかに異常であつたが（嬉しかったが空恐しかったのはなぜか？）（靈感がこもったものがあつた、というのはどういうわけか？）

パリから帰京の土産はレーニンの第三インターナショナルと、フランスの文学者アンリ・バルビュスの光（クラルテ）運動であつた。さらに、のちに気づいたことは、十年間肌身に学んだフランス文化と、フランスの友人との交友。それが帰朝後もつづいて「種蒔く人」運動はそれらの文化を呼吸し、リードをうけて、ユニークな、かがやかしい成果をあげたのだ。それにしても（空おそろしい、靈感のこもったものがあつた）とは何であろうか。

彼はバルビュスとの盟約を守つて、日本においてクラルテ運動を実践する義務があつた。そこで、帰京後第一に九州の新しい村をたずねて、武者小路と会っている。彼も實篤の反戦ドラマ「ある青年の夢」を読んで感激し、それを仏訳してロマン・ローランにおくつている——そういう関係がある。ところが武者先生は「自分は実践運動には向かない」と固辞し、有島武郎さんをすすめ、反戦の色紙をもらつて歸っている。そうだとすると、武者先生と小牧との間に、私の話が出なかつた、ということはあるまい。その竹馬の友から電

話が来たので、空おそろしさを感じ、靈感をおぼえたのは、判る気がする――。

とに角、虎の門の中華料理店でビールをのみ、徒歩青山の彼の住居に到り、酒をくんで、その夜のうちに、雑誌を出すことに同意し、その名を「種蒔く人」と銘名。ミレーの言葉「自分は農夫の中の農夫だ、自分の綱領は労働だ」を信条とした。

そして翌年一九二一年二月土崎版「種蒔く人」が生れたのだ。同人は二人の外に、小学同級の今野賢三、外に畠山松治郎、近江谷友治、のちに、安田養蔵、山川亮の二人参加。

小牧が小説「異国の戦争」を書いたのは、「種蒔く人」(一九二一年)から「文芸戦線」(一九二六年)にうつった時代。出版所は日本評論社であり、「新作長篇小説集」(一九三〇年)だった。その前日本評論社から「日本プロレタリア傑作選集」を出して成功しているのが今回も同じメンバーを望んでいたが、共産系(ナツプ)の作家がボイコットしたので、やむなく評論家の青野季吉や小牧近江まで動員して、漸く十作家をそろえることができた。その十篇中、思想的にも芸術的にももっとも成功したのは小牧の「異国の戦争」だった。巴里遊学中体験した第一次世界戦争に取材したものであり、小牧の詩人的才能がいかになく発揮されている。くわしくは小田切秀雄君の解説にゆずるが、小牧唯一の小説であり、プロレタリア文学の異彩の傑作である。

「異国の戦争」——目次

g	f	e	d	c	b	a
章	章	章	章	章	章	章
99	80	67	59	46	35	15

作者のことば

12

「異国の戦争」礼讃・金子洋文

3

解説・小田切秀雄

o n m l k j i h
章 章 章 章 章 章 章 章

223 207 184 170 153 136 123 116

243

作者のことば

一九一〇年七月十六日、日清戦争が生立ちの頃であつた十七歳の少年は、多分に帝国主義的な父とともにパリの旅に立つた。

そのとき、彼の旅行靴の底には『名将言行録』と『日本外史』が秘められていた。

初めから苦勞は覚悟の上だった。それにしても、貧乏の屈辱を忍ぶためには、あまりに惨めだった。まずブルジョアの誇りは、完膚なきまでたたきつけられた。

つぎに、性が控えていた。異様な未知の世界が展開しようとした。

その矢先、更に別の世界が姿を見せた。戦争である。無関心といつてもいい程わけもなく、それに引きずられていった。

やがて、現実の生々しさは、軍国主義の堤防を片端から崩して行つた。

少年は自らを欺くことの出来ない真実の前に途方に暮れるより他なかった。何もかも粉

微塵にされたのだ。

『異国の戦争』は必ずしも作者の身上話ではない。

まだ世の中の何であるかも知らなかった一青年が、ヨーロッパの悲劇をその発端から目撃したありのままの物語である。

